

## 資料 1

・**広隆寺**

『朝野群載』巻2 承和3年(836)の「廣隆寺縁起」〔割注〕**「秦公寺一名蜂岡寺」**「謹検日本書紀云。推古天皇十一年。冬十一月己亥朔。皇太子**上宮**王謂諸大夫曰。我有尊佛像。誰得此像、將以恭拜**秦造河勝**進曰。臣拜之。便受佛像。因以造**蜂岡寺**者。謹検案内。十一年冬。受佛像。小墾田宮御宇推古天皇即位壬午之歳。奉為聖徳太子。大花上秦造河勝所建立**廣隆寺**者。但本旧寺家地。九条河原里一坪二坪十坪十一坪十三坪十四坪廿三坪廿四坪廿六坪卅四坪。同条荒見社里十坪十一坪十四坪十五坪合拾肆町也。而彼地頗狹隘也。仍遷五条荒蒔里八坪九坪十坪十五坪十六坪十七坪。并六ヶ坪之内。即施入陸地肆拾肆町肆段壹珀玖拾貳歩也。又去延暦年中。別当法師秦鳳。竊取流記資財帳等逃亡。又去弘仁九年。逢非常之火災。堂塔歩廊。縁起雜公文等焼亡。然則此寺縁起資財等共焼亡。或散失。（後略）」

⇒前文は『日本書紀』の記事を引用し、広隆寺は秦河勝が建立した「蜂岡寺」であることを主張する。さらに、寺域が狭いことを理由に「九條河原里」と「同條荒見社里」から現在の地へ移動したとする。さらに、弘仁9年(818)に堂塔などが火災の被害にあったことを記録している。

・**「常住寺」・「野寺」**

冒頭でも述べたように、北野廃寺は「廃寺」と呼称しているように、史料上に創建期の寺号を見つけることができていない。しかし、発掘調査によって「野寺」と墨書された平安時代の土師器が出土したことから、『日本後紀』巻5 延暦十五年(796)十一月辛丑条「始用新銭。奉伊勢神宮。賀茂上下二社。松尾社。○施七大寺及**野寺**。（下略）」であったことが明らかにされている。さらに「野寺」は、『諸寺略記』「一野寺者。本名常住寺。桓武天皇御宇。延暦五年移建**常住寺野寺**也。遷都之時。自南京移渡於此京。帝御本尊也。」とあり、「野寺」は「常住寺」とも呼称されていたことが分かる。「常住寺」と「野寺」に関する記載は、『日本後紀』の中に残されている。『日本後紀』巻28 弘仁十一年(820)閏一月丁卯「先是。鑄銅四天王像於**常住寺**。至是功成。遷近江國梵釋寺。」『日本後紀』巻36 天長五年(828)六月丁丑幸「幸同範。右衛門獻物。雷鳴雨降。山崩水溢。屈清行僧卅人於**野寺**。轉誦大般若經。防水害也。」

⇒このように北野廃寺は平安時代以降に「常住寺」や「野寺」と呼ばれており、南都の七大寺に並ぶ寺格を有し、近江国梵釋寺と結びつきがあったことが分かる。

### 2. 北野廃寺と広隆寺の瓦の様相

●**北野廃寺**

**飛鳥時代（7世紀初頭～中頃）** 図2- 1～3

・特徴：飛鳥時代に属する瓦は3種類ある（図2- 1～3）。我が国初の本格的仏教寺院である飛鳥寺、そして飛鳥寺の次に造寺された豊浦寺と同範・同文関係にある。詳細な調整技法に差は認められるが、基本的な製作技法は類似する。このようなことから、飛鳥寺の発願者である蘇我氏と強い結びつきのあった人物が造寺に関わっていたことが想定できる。

・生産地：幡枝元稲荷窯と北野廃寺境内瓦窯から供給されている。したがって、造寺の開始に伴って境内の瓦工房もしくは幡枝丘陵の瓦工房に大和国から技術導入があったと推測できる。また、従前の研究では、北野廃寺境内瓦窯から幡枝元稲荷窯へと生産体制が移動もしくは拡大したとする説と、幡枝元稲荷窯から北野廃寺境内瓦窯へと生産体制が移動したとする説があるが、具体的な資料は提示されておらず、今後詳細な検討が必要と考える。

**白鳳時代（7世紀後～8世紀初頭）** 図2- 4

・特徴：この時代に比定できる軒瓦は少なく、非常に限定的な供給である。図2- 4は山田寺の系譜下にある軒丸瓦であるが、祖形となる山田寺との共通点は少なく、北白川廃寺から出土しているものと同文となる。山背国内における寺院の増加に伴って国内間での結びつきが強くなったと考えられる。

・生産地：不明。従前の研究では、北野廃寺創建瓦を幡枝丘陵で焼成していることから、幡枝丘陵で生産されていた可能性を指摘する。

**奈良時代（8世紀初中～末）** 図2- 5～10、図4-15～18

・特徴：白鳳時代とは異なり、軒瓦の種類が増加する。前代にはなかった軒平瓦も認められる。なかでも、平城宮式の軒瓦が占める割合が高く都との強い関係性が窺える。また、7・8・15は興福寺創建瓦と非常に類似した文様構成であり、顎の形式も段顎で興福寺と共通する。9や18の生産年代はこの時期に比定することができるとは、平安時代以降に再利用された可能性もあることから、使用年代については慎重に判断しなければならない。

第303回京都市考古資料館文化財講座 / 京都アスニー京都学講座

連続講座『京都の飛鳥・白鳳寺院』 第3回

2019年3月30日

## 北野廃寺と広隆寺

京都市文化財保護課 鈴木久史

はじめに

『日本書紀』によれば推古天皇十一年(603)、秦河勝が聖徳太子から与えられた仏像を安置するために「蜂岡寺」を建立したとする。「蜂岡寺」は現在の広隆寺とする説が有力とされているが、承和3年(836)に成立した『廣隆寺縁起』によると、創建当初は今のではなく、「九條河原里」と「同條荒見社里」にあったとする。そして、寺域が狭いことを理由に「五条荒蒔里」へ移転してきたと記録する。史料にある荒見とは紙屋川のこと指しており、紙屋川の西側に位置する平野神社の近辺が、「九條河原里」と「同條荒見社里」と考えられている。しかし、これまでに平野神社近辺で寺院に関連する遺構や遺物は確認されていないが、神社の南側に位置する北野上白梅町付近には、飛鳥時代の瓦が出土する北野廃寺があり、史料内容との齟齬を認めたくえて、北野廃寺が広隆寺の前身寺院であったとする意見が強い。すなわち、603年に秦河勝によって建立された「蜂岡寺」は北野廃寺であり、ある段階で現在の広隆寺へと移動してきたと想定する。しかし、この説にもいくつかの矛盾点がある。例えば、寺号である「蜂岡寺」は、寺院が建立された場所にいくつもの丘があったことに由来するが、北野上白梅町付近は平野が示しているように「平」らな「野」であり丘を想像させない。また、平安時代以降の北野廃寺は「野寺」と呼ばれており、「野」に建立された「寺」であったことが分かる。このように北野廃寺が位置する上白梅町の地形は、「丘」を想像させる「蜂岡」の由来と一致しないのである。他にも、現広隆寺が北野廃寺から移転したとするにも関わらず、北野廃寺と同範瓦が出土していないこと、移転したはずの北野廃寺が中世まで寺院として機能を維持していることなどがあげられる。

一方、北野廃寺は「廃寺」としているように、創建期の寺号が文献に記録されていない。しかし、発掘調査で「野寺」と墨書された平安時代の土師器が出土したことから、『日本後紀』延暦15年(796)に記載のある「野寺」の比定地として考えられている。「野寺」は『諸寺略記』によれば「常住寺」とも呼ばれており、南都の七大寺に並ぶ寺格を有していたことが分かる。他方、北野廃寺からは「<sup>いかるが</sup>鵜室」と墨書された9世紀後半頃の灰釉陶器が出土しており、聖徳太子建立の斑鳩法隆寺との関連を示唆させる。このように、北野廃寺は創建期の寺号は明らかではないが、平安時代以降には南都七大寺と同じ寺格をもつ「野寺」と呼ばれていたことが分かる。

以上のように、「蜂岡寺」と両寺院を巡る問題は、史・資料が多く残されているために整合性がとれなくなってしまい、未だに結論が出ていない。このようななかにあって、今回私に与えられた課題は、両寺院から出土した飛鳥・白鳳時代の瓦を整理し両寺院の様相を検討することにある。

### 1. 文字史料に見る寺号

まず、史料に見られる寺号を整理しておく。

・**蜂岡寺**

『日本書紀』推古十一年(603)「十一月己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊佛像。誰得是像以恭拜。時秦造河勝進曰、臣拜之。便受佛像。因以造**蜂岡寺**。」

『上宮聖徳法王帝説』「太子七つの寺」の「四天皇寺（中略）**蜂岡寺**、池後寺、葛木寺」

『廣隆寺縁起』推古天皇十一年、「皇太子上宮 王謂諸大夫曰。我有尊佛像。誰得此像、將以恭拜**秦造河勝**進曰。臣拜之。便 受佛像。因以造**蜂岡寺**者。謹検案内。（略）」など。

⇒『日本書紀』によれば、「蜂岡寺」は603年に秦河勝が建立した寺院で、聖徳太子から与えられた仏像を安置していたとする。以後の史料では、『日本書紀』の記事を踏襲し、『廣隆寺縁起』で広隆寺と蜂岡寺が同じ寺院であることを記している。

・**葛野秦寺**

『日本書紀』推古三十一年(623)「秋七月、新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、

並來朝。仍貢佛像一具及金塔并 舍利。且大観頂幡一具、小幡十二条。即佛像居於**葛野秦寺**。以餘舍利金塔観頂幡等。皆 納干四天王寺」

⇒秦氏は新羅からもたらされた仏像を安置するために「葛野秦寺」を建立したと考えられる。



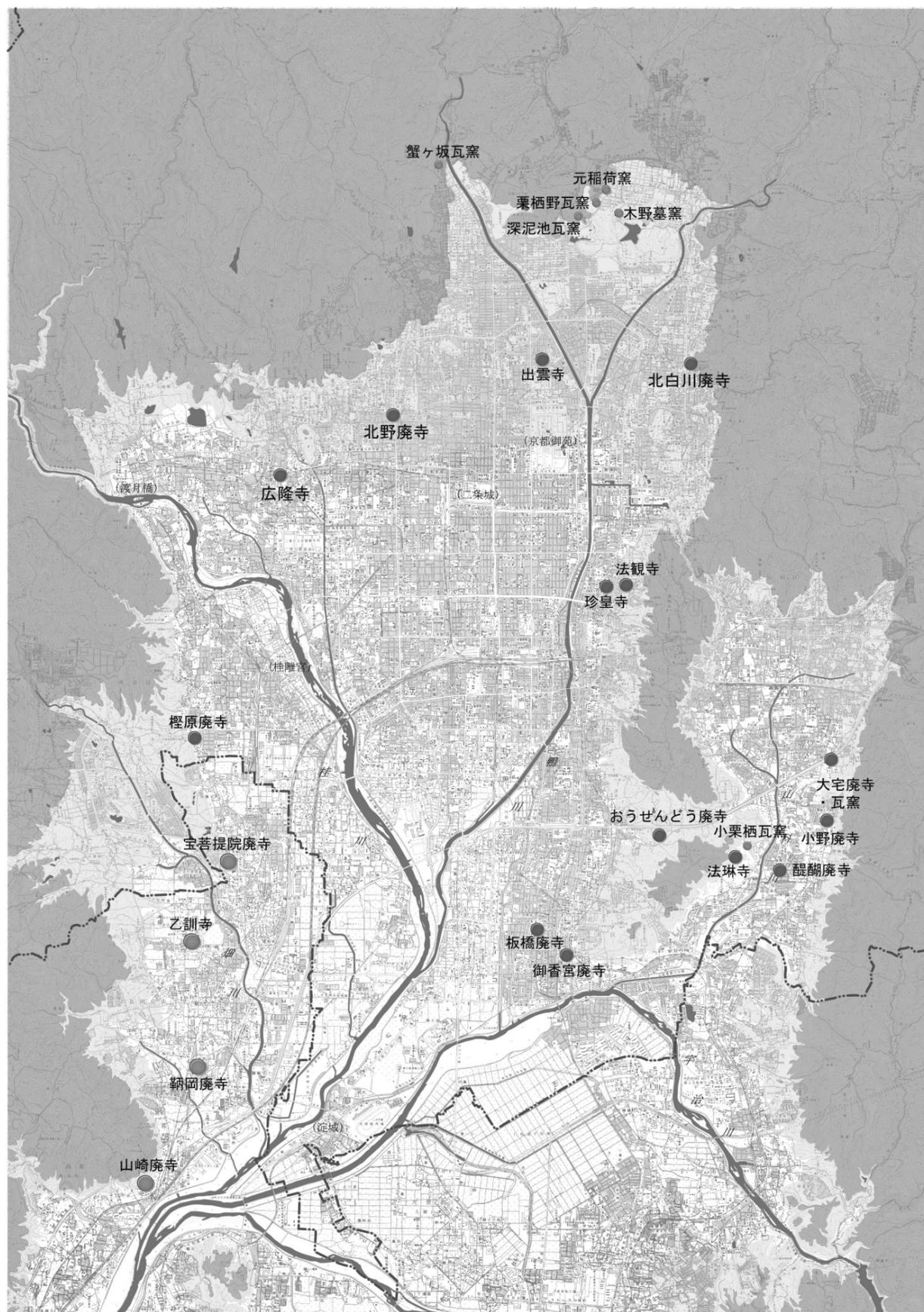


图1 飛鳥白鳳寺院位置図(1:10,000)

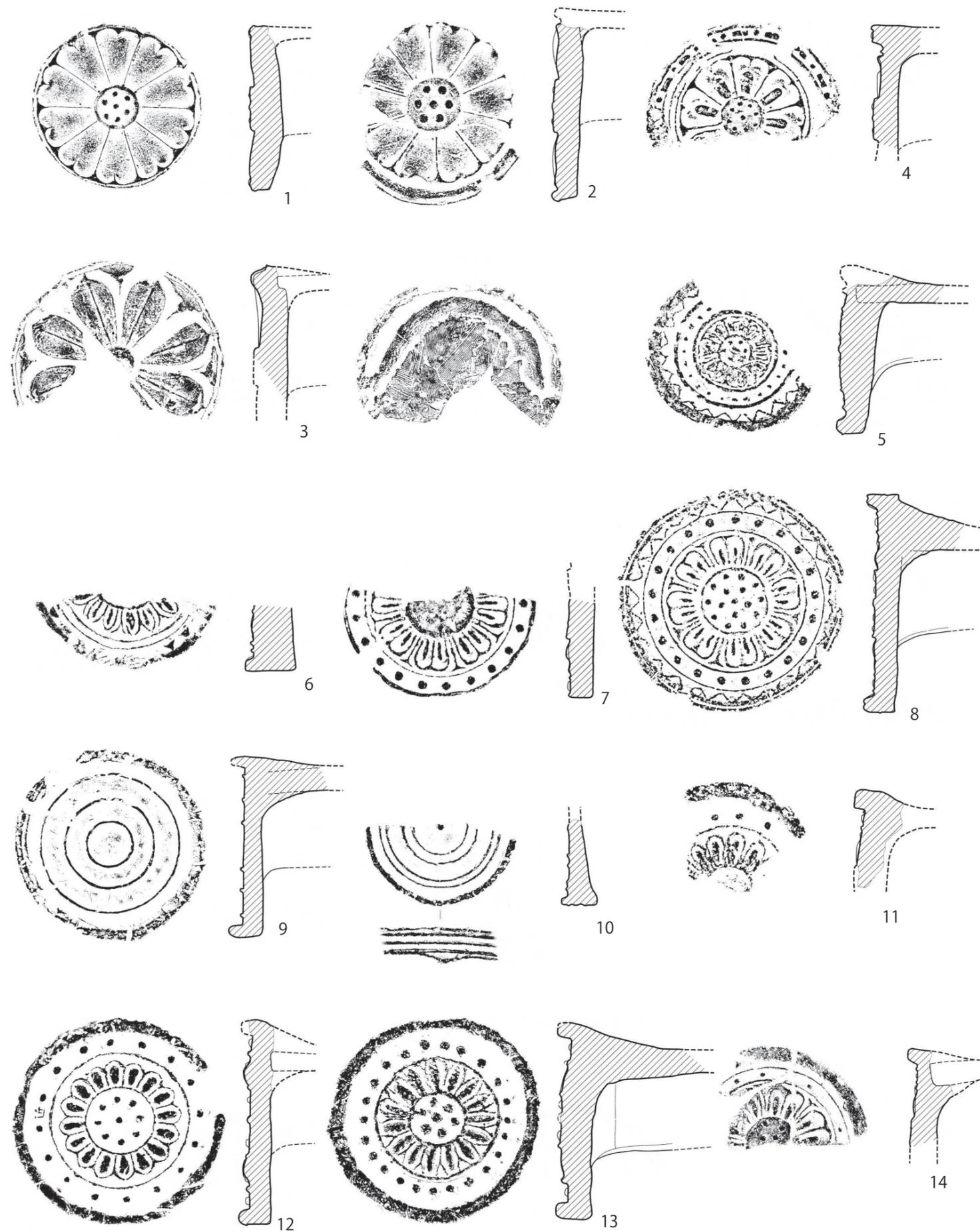


图2 北野廃寺出土主要軒丸瓦(飛鳥時代~平安時代前期まで)(1:4)

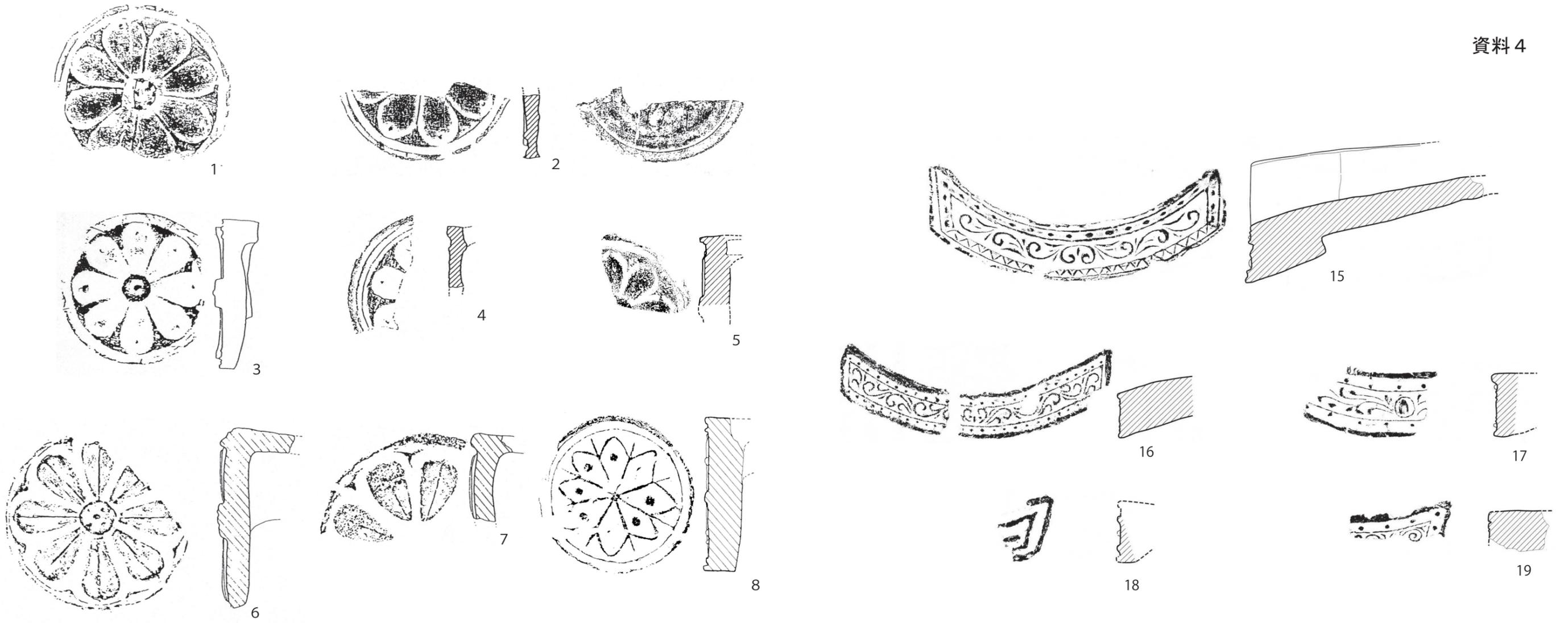


图4 北野廃寺出土軒平瓦（奈良時代～平安時代前期）（1:4）

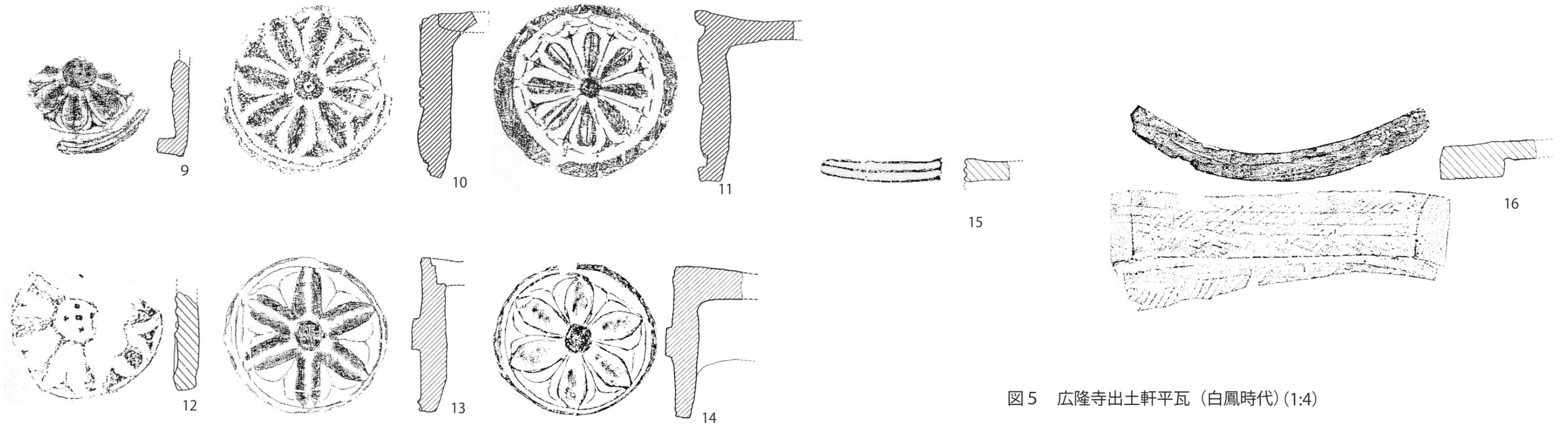


图5 広隆寺出土軒平瓦（白鳳時代）（1:4）

图3 広隆寺出土軒丸瓦（飛鳥時代～奈良時代）（1:4）

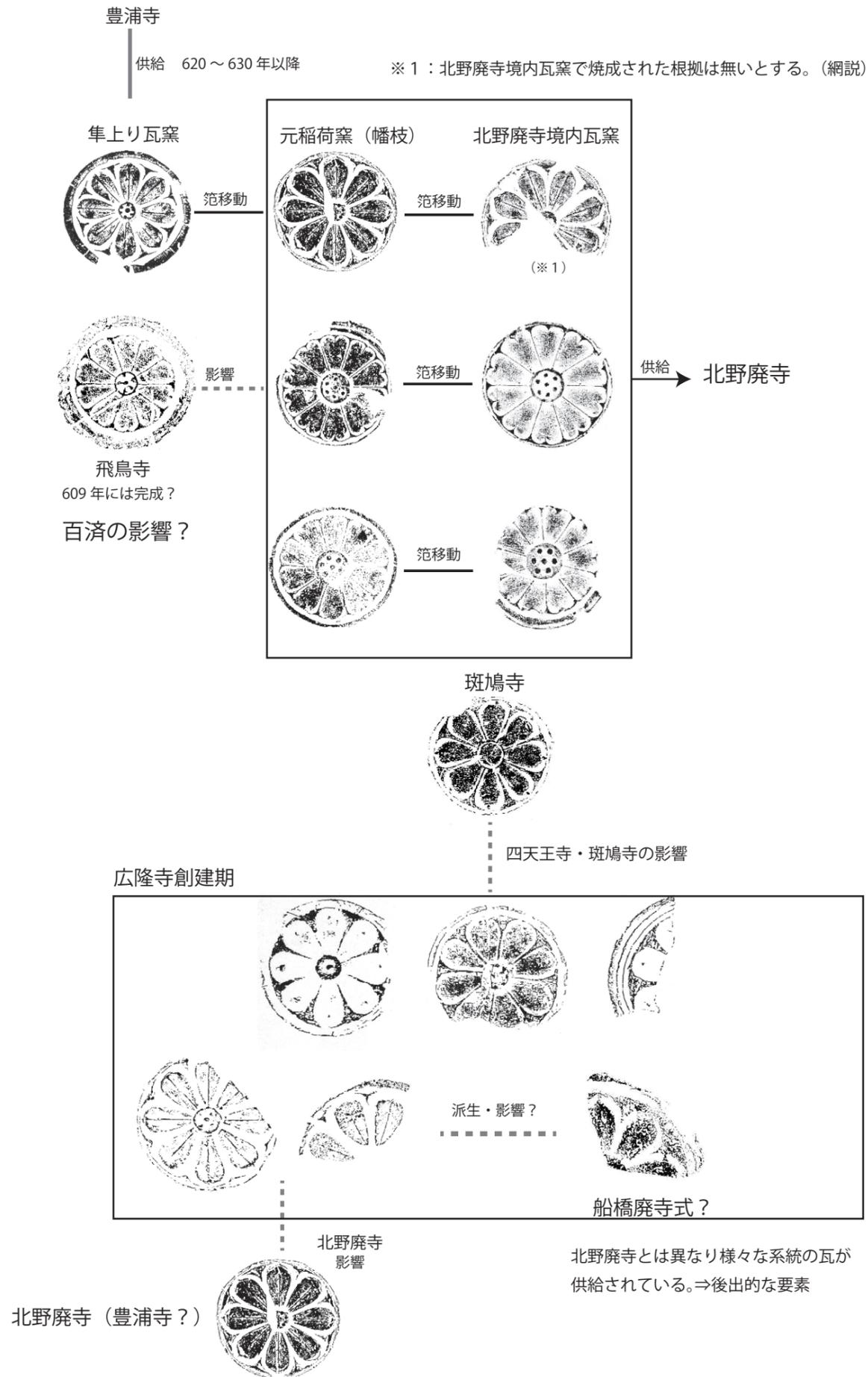
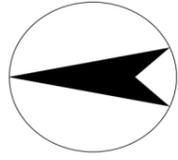


図6 北野廃寺・広隆寺創建瓦の同範・同文関係図

表1：北山背国古代寺院の変遷[上村和直第226回 京都市考古資料館文化財講座資料引用]

年代	天皇	主要事項・寺院	北野廃寺・廣隆寺関係史料	主要寺院の変遷						
				葛野郡	愛宕郡	紀伊郡	宇治郡	乙訓郡		
600	推古	588飛鳥寺造営 593四天王寺造営								
	舒明	601斑鳩宮造営 607法隆寺創建 622聖徳太子逝去	603蜂岡寺造営『日本書紀』 616新羅仏像貢ぐ『日本書紀』 622廣隆寺を移建『廣隆寺縁起』 623葛野秦寺仏像安置『日本書紀』	北野廃寺	廣隆寺					鞆岡廃寺
	皇極 考徳	641山田寺起工 645大化の改新								
650	斉明	この頃川原寺・小山廃寺造営								
	天智	670法隆寺被災	この頃蜂岡寺造営『上宮聖徳法王帝説・聖徳太子伝補闕記』		檜原廃寺		北白川廃寺			乙訓寺
	天武	672壬申の乱								
	持統	680薬師寺造営 694藤原宮遷都								宝菩提院
700	文武									
	元明 元正 聖武	710平城京遷都 741国分寺建立の詔					おおせんどう廃寺	大宅廃寺	法琳寺跡	
	孝謙 淳仁 称徳 光仁		771廣隆寺『七代記』							
800	桓武	784長岡京遷都 794平安京遷都	796平城宮野寺『日本靈異記』 796野寺新銭施入『続日本後紀』	野寺・常住寺						
	平城		「野寺」墨書土師器							
	嵯峨 淳和 仁明		818廣隆寺焼失『廣隆寺縁起』 836秦公寺一名蜂岡寺『廣隆寺縁起』 この頃廣隆寺復興							
	850	文徳		858常住寺別院火災『文徳天皇実録』 「鳩室」墨書灰釉陶器 873廣隆寺資材帳成立 884常住寺焼亡『日本三代実録』						

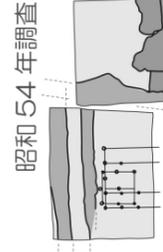


西大路通

平成 22 年調査

昭和 61 年調査

平成 8 年調査



昭和 54 年調査

平成 11 年調査

昭和 52 年調査

礎石建物  
(講堂)

昭和 40 年調査

平成 2 年調査

瓦積基壇

昭和 55 年調査

昭和 50 年調査

北野白梅町駅

昭和 53 年調査

昭和 54 年調査

平成 29 年調査

昭和 61 年調査

平成 9 年調査

平成 21 年調査

今出川通

昭和 52 年調査

昭和 54 年調査

昭和 63 年調査

昭和 50 年調査

昭和 54 年調査

平成 30 年調査

紙屋川

一条通

資料 6

0

100m

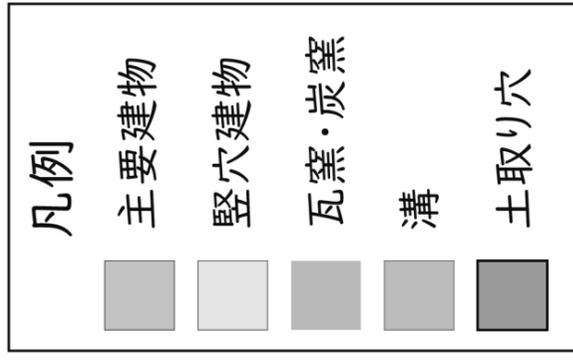


図 7 北野廃寺調査区位置図